

### 3) ゲンノショウコ=現証拠

ゲンノショウコはフウロソウ科フウロソウ属の多年草で、日本各地の路傍や川の土手、田圃の縁などの草むらに生える。日本以外では南千島、朝鮮、台湾にも分布する。高さは30~50cmほどで、茎は匍匐してよく枝分かかれし八方に広がる。葉は掌状に3~5裂し、表面には暗紫色の斑紋があり、葉には独特の悪臭がある。夏、葉腋から花柄を出して径1~1.5cmほどの小花を二つずつ着ける。花色は白または淡紅紫色で、白色のものは東日本に、紅紫色のものは西日本方面に多く、両種が混生しているところもあり、中には八重咲のものもある。花が終わると果実も二つずつクチバシ状に着けて、完熟すると中から種子を弾き飛ばす。

この仲間の植物は美しいものが多く、高山植物として知られるハクサンフウロや、青い花を咲かせるタカネゲンナイフウロ、紅色が濃くこの属では最も大きな花を咲かせるアサマフウロなど、登山者にはお馴染みの花も多い。他にも北海道から東北地方の海岸でよく見かけるハマフウロや、花卉に切れ込みが入ったイブキフウロなどさまざま、どれも人目を引くものばかりである。

和名の由来は下痢止めとして古くから利用されており、これを飲むとすぐに効果が現れるからであるといわれている。別称としてイシャナカセとかイシャイラズ、タチマチグサなどとも言われており、薬効の強さを表現したものが多く見られる。中には果実や種子の形状から、ローソクソウとかミコシグサなどと呼ぶ地方もある。ミコシグサは種子を弾き飛ばした後の形が、神輿の屋根のように見えるためである。また二輪ずつ付ける花は一つが咲き終わるまで、次の花を咲かせないために「母子草」という地方もある。しかしハハコグサといわれる一般的なものは、別名オギョウとも呼ばれるキク科ハハコグサ属の越年草で(08-02-05)、春の七草の一つになっている。この草の若苗を昔は餅に入れていたが、今ではこの習慣はすっかり廃れて、同じく春の七草の一つであるヨモギに替わってしまった。

ゲンノショウコの学名は『*Geranium thunbergii*』で、属名はツルを意味するギリシャ古名に由来し、果実の形がツルのクチバシに似るところから名付けられた。中国では『牛扁』と呼ばれているが、本種は民間治療薬としての色彩が濃く、特に漢方薬には登場しない。

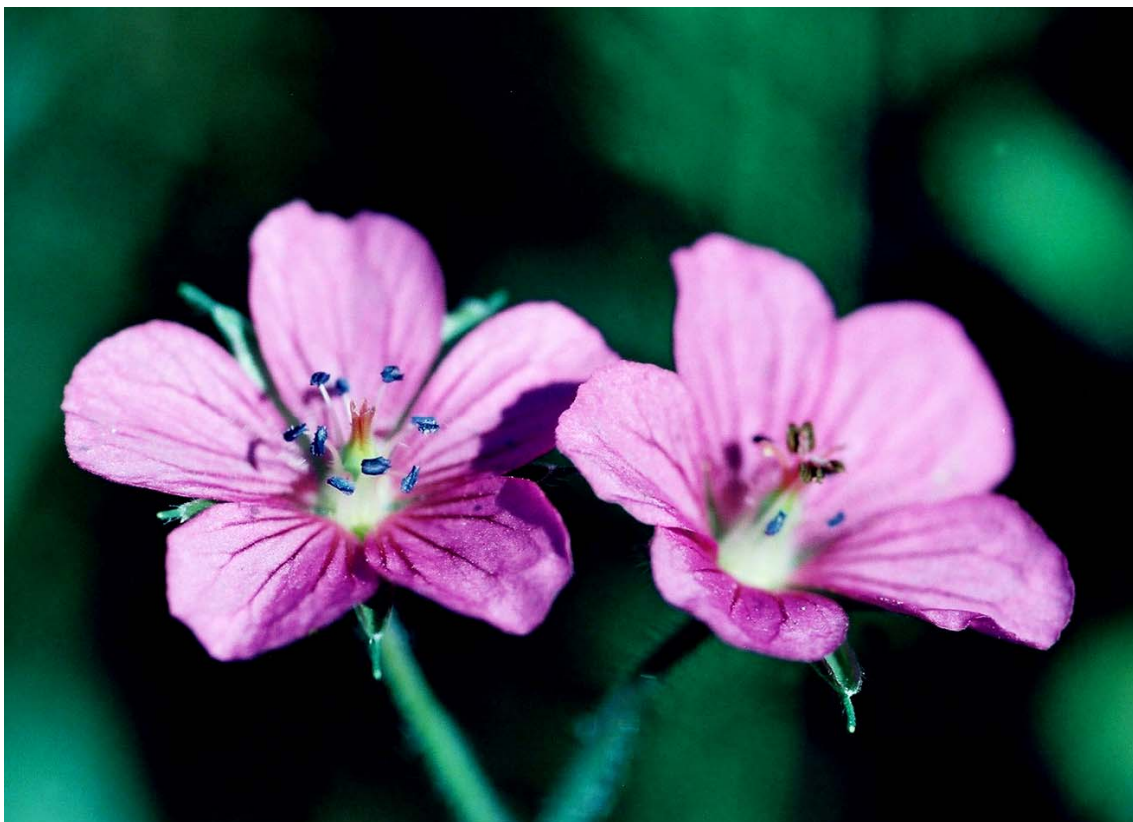
さて茎、葉を乾燥させたものが生薬としてのゲンノショウコで、主成分の主なものはタンニンである。これを煎じて飲むと下痢止めとして有効なばかりか、便秘にも良いとされており、湿疹、かぶれには煎じた液を湿布すると良い。このために昔から健康飲料として煎じて、お茶がわりにも飲まれていた。このゲンノショウコの生薬は風呂に入れると浴湯料にもなり、冷え性や皮膚のタダレなどにも良いとされている。昔から民間薬として広く知られており、日本薬局方にも記載され、家庭薬としてもつい先日まで、どこの家庭の救急箱にも納められていた。



ゲンノショウコ、これもフウロソウの仲間である。アカバナ種とシロバナ種とがあり、関西以西には前者が関東以北では後者が多いが、地球温暖化で変化が起こっている(埼玉県日高市巾着田)。



ゲンノショウコの白花種(埼玉県深谷市農林公園)。



ゲンノショウコのアカバナ種(埼玉県深谷市農林公園)。

[目次に戻る](#)